

## 1 殺人犯ユージン・アラムの夢

爽やかな夏の

静かで涼しい夕暮れ時  
二十四人の幸せそうな少年たちが  
学校から飛び出してきた  
ある者は駆け ある者は跳ね 5  
まるで池のマスの稚魚のよう

<sup>けが</sup>  
穢れなき少年たちは

はしゃいで駆けてゆき  
平らな草地にやってくると  
クリケットの三柱門を打ち込んだ 10  
沈みゆく輝く夕日は  
リンの町を照らしていた

元気な鹿のように 少年たちは

駆けまわり歓声をあげた  
あらゆるものを喜びへと変える 15  
それは少年たちだけがなせる業  
だが 助教師は皆から離れて座っていた  
なんとも陰気な男だった

帽子を脱ぎ ボタンをはずし

天から贈られる気持ちの良い風を受けていた 20  
ある激しい思いが額に皺をきざませ  
胸騒ぎを憶えていた  
そうして両手で頭を抱え込み  
両膝に置いた本を読んでいた

一頁また一頁とめくっては 25

脇目を振ることもなかった

<sup>こんじき</sup>  
金色の夕暮れの中

己の魂の平安のため かの本を読んでいた  
読書にふけて 身は細り  
蒼ざめ 目はどんよりとしていた 30

ようやく男は分厚い本を閉じ  
すばやくしっかりと  
その黒ずんだ表紙を押さえつけ  
真鍮製の留め金をしっかりと掛けた  
「ああ神よ 私の心もこんな風に  
留め金を掛けられたなら」 35

それからすっくと立ちあがり  
物憂げにあたりを歩いて回った  
草地のあちらこちらへと  
そして木陰の一角を抜けると 40  
すると思ひもかけず そこで幼い少年が  
わき目も振らず本を読んでいるのだった

「可愛い坊や 何を読んでいるんだい  
冒険話かい おとぎ話かい  
それとも英雄の話かい 45  
争い絶えぬ王や君主の話かい」  
少年は見上げると こう言った  
「『アベルの死』だよ」

突然の痛みに襲われたかのように  
助教師は大きく六歩後ずさりした 50  
そうはしたものの  
ゆっくりと元の場所へと戻り  
少年のそばに腰を下ろすと  
カインの話語った

そして 今度は長々と血にまみれた人間たちの話を始めた 55  
今の世まで語り継がれる殺人の数々  
人知れず殺され  
ひそかに墓に埋められた者たちの話  
人気のない森で人を刺し殺した話  
洞窟での人殺しの話 60

傷つけられた人々の靈魂が  
草葉の陰から叫ぶ様を  
亡霊の手が  
埋められた場所を指さす様を  
神が見せる夢の中で 65  
知られざる罪深い行為が明かされる様を

カインの呪いの下

地をさまよう殺人者たちのことを語った  
彼らの目の前に真っ赤な雲が広がり  
頭には炎がめらめらと燃える  
血が彼らの魂に染みを  
永遠に消えぬ染みを残した

70

「ああ 実際 私にはわかるのだ  
奴らの苦しみは果てしない  
苦痛 苦痛 筆舌に尽くせぬ苦痛  
一体誰が命の聖い流れを涸らしたのか  
なぜなのだ 昨日 私は 夢の中で  
殺人の罪を犯したのだ

75

私に悪事をなしたわけでもない  
か弱い老人だった  
男を人気のない荒野に連れ出した  
月が冷たく冴え冴えと輝いていた  
私は言った 『今ここで あなたは死ぬのだ  
あなたの金を手に入れる』

80

ごつごつとした棒を二度振り下ろし  
重い石で一撃  
それから素早くナイフで一刺し  
それですべて事足りた  
足元にあるのは  
ただ命のない骸だけ

85

90

命のない骸にすぎぬもの  
私に齒向かう力もないもの  
それだけに私は老人が怖かった  
身じろぎもせず倒れているから  
老人の顔には尊さが浮かんでいた  
殺されてなおも残る人間の尊厳

95

そして見よ 遍き渡る天空が  
青白い炎を燃やしている  
無数の恐ろしい目が  
非難の眼差しを投げている  
私は死んだ老人の手を取り

100

名前を呼んだ

ああ 神よ 骸<sup>むくろ</sup>に残る  
尊厳を目にして私は震えた  
しかし私が命のない骸<sup>むくろ</sup>に触れた時 105  
血がどっと 迸<sup>ほとばし</sup>った  
凝固した血の一滴一滴が 燃える塊となって  
私の頭を焦がしていた

私の頭はまるで激しく燃える炭のよう  
心は溶けぬ氷のようだというのに 110  
私のみじめなみじめな魂は  
悪魔の手中にあるのだ  
幾度となく私は呻いた  
二度 骸<sup>むくろ</sup>は呻いた

今や眉をひそめた空から 115  
天の遥か高みから声が聞こえた  
血の復讐を求める靈魂の  
恐ろしい声  
「罪深い男よ お前が殺したのだから  
その体を私の眼前から隠せ」 120

私は恐ろしい骸<sup>むくろ</sup>を持ち上げて  
川に放り込んだ  
よど 澱んだ流れはインクのようにどす黒く  
川底は限りなく深かった  
可愛い坊や 忘れないでくれ 125  
これは夢にすぎないのだよ

骸<sup>むくろ</sup>はドボンと音を立て  
ついにはよどみの中へ消えていった  
すぐに私は血みどろの手をこすり  
火照る額を水で冷やした 130  
その晩は学校で  
幼い少年たちの中に戻った

ああ 天よ 少年たちの穢<sup>けが</sup>れのない魂と  
私の穢<sup>けが</sup>れたぞっとするような魂を思うと  
少年たちの祈りの輪にも 135  
夕べの礼拝にも加われない

私はまるで聖なる智天使に紛れこむ  
地獄の悪魔のようだ

平安が一人一人の少年に付き添い  
その穏やかな眠りの枕を整える 140  
しかし罪が私の容赦ない侍従  
私を床へと誘い  
血に染まる真っ赤な指で  
真夜中の帳とばりを下ろすのだ

夜もすがら私は苦しみ悶える 145  
暗く深い苦悶の中  
熱を持つ目をつぶ瞑ることもせず  
ただおびえて眠りを見つめる  
罪が眠りに  
地獄へ至る扉の鍵を渡してしまった 150

夜もすがら私は苦しみ悶える  
時を告げる鐘を数えるのに疲れ果て  
ある恐ろしい思いが付きまとい  
私を悩ませた  
それは私を罪へと駆り立てた  
最初の激しい衝動にも似た強い欲望だった 155

ある一つの抗い難い強い思いが  
有無を言わせず他の全ての思いを屈服させた  
脈打つごとに ますます激しく  
誘惑に駆られていった 160  
ついには川底に眠るあの男を  
見に行かずにはいられなくなった

空に朝日が差すやいなや  
重い体を起こした  
不安に駆られ 血走った眼で 165  
あのだす黒く呪われたよど澱みを探した  
川底で骸むくろはあらわになっていた  
思いもかけず川の水は干上がっていた

陽気なヒバリは目を覚まし  
露を翼から振り落とした 170  
ヒバリが飛び立つのも見えず

その歌も聞こえなかった  
あの恐ろしい行いに  
再び身を屈めていたからだ

何かを追うかのように 息も継げず 175  
骸<sup>むくろ</sup>を背負うと走り出した

人が起き出す前に  
墓を掘る 暇<sup>いとま</sup>はなかった  
人気がない森に 落ち葉を山と積み  
私は殺した男を隠した 180

その日は丸一日 学校で本を読んだが  
心はここにあらず  
昼間の仕事を終えるやいなや  
私はひそかに森に行った  
強い風が落ち葉を払い 185  
<sup>むくろ</sup>骸はあらわになっていた

地に突っ伏すと  
はじめて涙があふれた  
私の秘密を隠すことを  
土が拒むのだ 190  
陸も海も拒むのだ  
たとえ幾万尋<sup>ひろ</sup>の深みに沈めても

恐ろしい復讐の靈魂が願うのだ  
血は血によってあがなえと  
そうだ 骸<sup>むくろ</sup>を洞窟に埋めようとも 195  
小石をかぶせようとも  
時経て 肉が朽ち果てようとも  
白骨は白日の下にさらされるのだ

ああ神よ あの恐ろしい夢が  
私に付きまとい眠らせない 200  
また再び めまいに襲われて  
私は人の命を奪うのだ  
血塗られた右の手は燃えるように熱い  
まるで火に焼かれた殉教者クランマーのように

休まることのないこの土くれに 205  
陸も海も平安を与えることはない

恐ろしい何者かが私の魂を追い  
「今も私の目の前に立っている」  
少年は怖がって顔をあげ  
男の額に浮かぶ玉の汗を見た 210

その夜 穏やかな眠りが  
少年の<sup>くちづけ</sup>頬に接吻をする間  
冷たく垂れこめた霧の中 リンの町から  
二人の厳しい顔つきの男がやってきた  
ユージン・アラムは二人に挟まれて 215  
手首に<sup>かせ</sup>枷をはめられ歩いて行った

(鎌田明子訳)